

日本語学習者はスピーチスタイルをどう認識しているか

—— 日本滞在にともなう認識の変化についての事例研究 ——

岡 崎 渉

(キーワード：スピーチスタイル, 上級日本語学習者, スタイルの認識, 気づき)

1. はじめに

日本語では文を作る際、丁寧体・普通体というスピーチスタイル（以下、スタイル）¹のいずれかを選ぶ必要があり、同一談話においてはいずれか一方に統一するのが原則とされている。だが、実際の談話データにもとづいた多くの研究から、スタイルは相手との社会的関係や場面といった固定的な要因により一律で使い分けられるものではなく、同一談話でも混用されることがわかっている。さらに、スタイル自体の意味も、単純に敬意の有無を表すだけでなく、コンテキストに応じて多様な社会的・文化的意味を表すものであることがわかっている（Cook, 2002, 2008; Okamoto, 2011 等）。

そのようなスタイルを理解し使いこなすことは、日本語学習者（以下、学習者）にとっても容易ではない（Cook, 2001; ウォーカー, 2011; 岡崎, 2015, 2016等）。だが、日本語教育の現場においてスタイルは多くの場合、初級段階で原則的な使い分けが説明されるのみで、基本的には丁寧体でのみ学習が進められ、中級段階以降はほとんど取り上げられることもない。そのため、日本に来て母語話者によるスタイルの運用実態を目の当たりにした学習者は、自分の知識とのギャップを目の当たりにし、戸惑いや違和感、不快感を覚えたり、自分のスタイルの用い方に葛藤を覚えたりすることになる（Iwasaki, 2011; 田所, 2015等）。

スタイルの用い方に唯一の正解はなく、その使用は母語話者でも個人内・個人間で異なっている。そのようなスタイルについて、教室指導で学習者の理解を深めるには、一方的に教授するよりも、学習者が自ら自分の認識に問いかけられるような機会を設ける必要がある。そのためにはまず、学習者はスタイルに対しどのような認識を抱いているのか、その認識はどのような経験により、どのように変容するのかといったことを把握する必要がある。だが、こういった学習者のスタイルへの認識についての研究は乏しく、知見が不足している。そこで本研究では、中国人上級学習者4名を対象に、個々の学習者によるスタイルの認識と、その認識の日本滞在中にともなう変容を調査する。

2. 日本語のスタイルに関する研究

2.1 母語話者によるスタイルの運用

日本語のスタイルは、相手との関係や場面、話題といった外的要因により、丁寧体・普通体の一方が選ばれるものとされるが、実際は同一談話でもしばしばもう一方のスタイルへのシフトが起こる（生田・井出, 1983; 三牧, 1993, 2000, 2013; 宇佐美, 1995, 1998, 2001; 岡本, 1997; 大浜・鈴木・多田, 1998; Cook, 2002, 2008; 陳, 2003; 伊集院, 2004; 大津, 2007; 申, 2007; ナズキアン, 2007; 長谷川, 2010; Okamoto, 2011; 今村, 2014; 岡崎, 2017, 2020等）。先行研究では特に、丁寧体主体の会話における普通体へのシフトが調査されてきた。一連の研究によって、シフトはランダムに起こるのではなく、相手の発話を繰り返すときや先取りするとき、確認要求を行うとき、率直な感情を表出するときといった特定の発話タイプで起こりやすいということがわかっている。その際の普通体も、どんな普通体でも用いられるわけではなく、「ね」「よ」といった終助詞や、聞き手への問いかけといった聞き手目当て性の強い普通体はほとんど用いられない（岡崎, 2017）。このように、丁寧体主体の会話において普通体へのシフトを行うことで、話者は相手への敬意を表すという社会規範と、親しみを表すという個人の表現を両立させることができる（三牧, 2002; 長谷川, 2010等）²。家族間や友人間での普通体主体の会話においても、丁寧体にシフトすることで、さまざまな社会的役割やアイデンティティを表示したり（Cook, 2008）、冗談であることを示したりする機能が観察されている（大津, 2007）。このようなスタイルの

複雑多様な運用を、母語話者は普段特に意識することなく行っており、しかもその用い方は個人間・個人内でもバリエーションが存在する(Okamoto, 2011)。

2.2 学習者によるスタイルの運用

そのようなスタイルを使いこなすことは、日本語学習者にとっても容易ではない。日本語学習者用の教科書では、その多くが丁寧体と普通体が対置される形で提示されており、丁寧体は目上の者や初対面の者と話すときのフォーマルなスタイルであり、普通体は友人や家族と話すときのカジュアルなスタイルであるといった説明がなされている(Cook, 2008; 今村, 2014)。このようなスタイルの原則的な用法と使い分けの説明は初級段階でなされるものの、表現形式の導入に終わっているものが多く、スタイルの使い分けやそこに関わる心理的・社会的要因についての説明はほとんどなされていない(ウォーカー, 2011)。日本語学習者用の教科書は通常、丁寧体を基本に構成されるため、教科書を主とした学習だけでは、母語話者のスタイル運用の実態について学ぶ機会は得られない。

実際に、海外で学ぶJFL(Japanese as a Foreign Language)学習者の運用実態を見た研究では、教室指導だけで、相手や場面に応じたスタイルの適切な運用を行えるようになるのは難しいことが示されている(Cook, 2001; 陳, 2004; 林, 2005; 田, 2009等)。だが、留学などで来日し、日本での生活を経験することにより、スタイルの運用は変容することもわかっている(Marriott, 1995; Iwasaki, 2005, 2011; McMeekin, 2006, 2014; Caltabiano, 2008; Cook, 2008; 増田, 2010; Taguchi, 2015, 2016; 奥西, 2019等)。一連の研究によると、当初はおおむね丁寧体を用いていた学習者でも、留学経験を通して、必ずしも母語話者同様ではないものの、普通体も使い、次第に規則的なスタイルの使い分けを行うようになったことが報告されている。しかしながら、JSL(Japanese as a Second Language)上級学習者であっても、依然としてスタイルの不自然な使用、失礼になりかねない使用が見られる(李, 2003; 三牧, 2007; 申, 2009; 嶋原, 2014, 2015; 岡崎, 2015, 2016等)。学習者は日本で生活するだけでは、スタイルを母語話者同様に使えるようになるわけではないことが窺える。

2.3 学習者によるスタイルの認識

学習者のスタイルについては、運用面を見た研究ほど多くはないが、認識面を探究した研究もなされている。Cook(2001)は、ハワイの大学で学ぶ初中級学習者120名を対象に、スタイルを適切に認識できているかどうかを測るテストを行っている。テスト材料は、アパレルショップのアルバイトに応募した3名による日本語での自己アピール音声であり、これを聴き、採用されるにふさわしいと思う者を1名選ぶというものであった。その結果、8割の学習者が、スキルや条件は良好で流暢な日本語を話すか、母語話者からすれば明らかに失礼なスタイルの用い方をする応募者を選んだ。スタイルの基本的な使い分けについては既に指導されていたにもかかわらず、その社会的・文化的な意味は理解されにくいことが窺える。Cookの研究は初中級学習者を対象としたものだが、上級学習者であっても、スタイルの認識は母語話者と異なることが示されている。山口(2002)は、学習者による場面の認知とスタイル選択の関係を、談話完成テストとインタビューにより調査したところ、スタイルの使い分けに際して日本人は、相手と同じグループに属するか否かを表す「ウチ/ソト」を重視する傾向があったのに対し、学部・大学院留学生である中国人・台湾人は、「親疎関係」や発話行為の「内容の軽重」が重要な判断基準である傾向が示された。

日本滞在にともないスタイルの認識がどのように変容するか、個々の学習者を対象に調査した研究もなされている(Iwasaki, 2005, 2011; Ishihara & Tarone, 2009; 田所, 2015)。一連の研究では、主にインタビュー調査を通して、母語話者の用いるスタイルに対し、コミュニケーション上の重要さや用法の多様さに気づいたり、疑問や不快感を抱いたり、あるいは自身はどうスタイルを用いればよいか葛藤を覚えたりする様子が示されている。Ishihara & Tarone(2009)は、短期～長期の日本留学を経たアメリカの大学で学ぶ学習者7名に、口頭談話完成テストとインタビューを行っている。学習者は、日本語ではスタイルをどう用いるのが期待されているかという規範を知識としてもっていても、上下関係やジェンダーに関して自身のアイデンティティに反する場合、ときにあえてそこから逸脱する場合のあることが示されている。Iwasaki(2011)は、1年間の留学を経たアメリカ人学習者4名に対し、スタイルの認識の変化についてのインタビューを行っている。ある学習者は、母語話者から期待されるキャラクターがあることを感じ取り、それに応えようとして普通体の使用が多くなったこと、別の学習者は、スタイルにより敬意と親しみを両立させようとスタイルシフトを行うようになったことなどが述べられている。田所(2015)は、日本への長期留学経験をもつ韓国人学習者に対するインタビュー調査を行っている。学習

者は来日以降、母語話者のスタイルの用い方に対しさまざまな疑問や不快感を覚えたものの、自分なりに納得できる解釈を導こうとした様子が語られている。田所の調査結果から、学習者のスタイルに対する認識は個人の性格や考え方に依存することが指摘されている。

以上のように、学習者は日本滞在を経ることで、スタイルに対して必ずしも母語話者の認識に近づいていくわけではなく、むしろ学習者独自の認識を抱き得ることが窺える。学習者はスタイルの用い方が母語話者と同様でなければならない理由はないが、少なくとも母語話者のスタイルに対する認識を把握した上で用い方を判断する必要がある。さもないければ、スタイルはどのような場合にどのように用いることで、どのように理解されるのかの確に判断できないということになり、相手のメタメッセージに気づかなかつたり、自分が意図した通りに理解されず、互いに誤解や不快感を生じさせたりしかねないためである。

3. 目的

日本語でのコミュニケーションにおける重要さと、学習者のスタイルに対する運用や認識の実態に鑑みれば、スタイルは初級段階のみならず、中級段階以降も日本語教育に取り入れる必要がある（三牧, 2007; ウォーカー, 2011等）。とはいえスタイルのような、多分に社会的・文化的意味の関わる言語使用は、母語話者でもその使用実態を内省することは難しく（清水, 2009: 277）、さらにスタイルはアイデンティティ表出の手段でもあるため（Okamoto, 2011）、文法のようにその理解や用法に唯一の正解があるわけではない。そうである以上、原則的な用法以上のことを、教師の直感だけを頼りに「正しい日本語」として教えることはできない。田所（2015）の指摘するように、日本滞在を経てもスタイルの認識は個人の性格や考え方に依存するのなら、なおさら一方的に教授するという方法ではなく、学習者自身が日常生活の中で、自発的に認識を変容させていく必要がある。そのために教師にできることは、学習者が問いを抱くような機会を設け、認識が変容するのを促すことであろう。

そのような教育実践を行う前提として、学習者は母語話者のスタイル運用をどのように認識しているのか、その認識はどのような場面を経験することで、どのように変容するのかといったことを想定する必要があるが、そのための知見は不足している。上述の通り、スタイルについて学習者の運用面を見た研究は盛んになされてきた反面、認識面を見た研究には乏しく、一般化、理論化を図れるほどの事例が収集されていない。よって本研究では、日本に滞在する学習者は、スタイルに対しどのような認識を抱き、その認識はどのような経験によりどのように変容するのかを、事例研究として調査する。

4. 方法

4.1 調査対象者

調査対象者は、日本に住むのは初めてであり、来日から間もない中国語を母語とする日本語上級学習者4名とした。全員が20代の女性であり、大学の研究生（学習者A）および大学院の1年生（学習者B, C, D）であった。学習者の来日した直後から調査を開始するのは、スタイルの認識にかかわる事例をより多く記録できるためである。4名とも日本語能力試験のN1に合格していることをもって上級レベルと見なしたが、これは上級学習者であれば日本語の基礎知識を十分に備えていると言えるため、スタイルへの注意も向きやすいと考えられるためである。また、対象者を中国語母語話者としたのは、先行研究が英語母語話者、韓国語母語話者を対象としたものに偏っているためである。4名の調査対象者には、あらかじめデータ収集の目的、および依頼内容、謝金額、得られたデータの用途、ならびに調査結果は本人が特定できない形で公表されることを説明した上で、調査協力の承諾を得た。

4.2 調査方法

学習者によるスタイルの認識面を見た先行研究では、調査方法として主にインタビューが用いられているが、長期の間の出来事や認識の変化を時間が経ってから聞き出そうとしても、思い出して答えられる範囲は限られよう。そこで本研究では、学習者にオンライン上で共有されたエクセルファイルを用意し、そこに日本語観察記録として、日常生活の中でスタイルに対して気づいたこと、思ったことがあれば随時記入してもらう方法をとることにした。その都度記録してもらうことで、認識とその変容をより正確かつ詳細に把握できるものとする。共有エクセルファイルには教示文として、「今後、日本人のスピーチスタイルや話し方、丁寧さの関わる日本語の

使い方全般について、気づいたことや思ったことがあれば、何でも記入していただきます。「スピーチスタイル」とは、ですます体／非ですます体だけでなく、尊敬語・謙譲語・丁寧語の使用／不使用や、終助詞の使用／不使用など、話し方・伝え方の丁寧さに関わる日本語のすべてを含みます。」と記載した。学習者に記入してもらう欄には、スタイルに関して「いつ?」「どこで?」「誰が、どのように?」「どう思った?」という見出しを設けることで、何を記入すればよいのかわかりやすくした。調査を実施したのは、学習者Aが2022年10月から2023年3月までの6か月間、学習者Bが2023年3月から8月までの6か月間、学習者CとDが2023年5月から8月までの4か月間であった。いずれも来日からさほど期間を空けないよう調査を開始した。

記入してもらった日本語観察記録の中で、書かれた内容について調査者がはっきり理解できなかったところや、十分な情報が書かれていないと思った点については、対面またはメール、テキストチャットでインタビューを行い、事実関係を確認したり、詳細を尋ねたりした。さらに、調査期間の終了時には、総括として、来日以降スタイルに対する認識と使用はどう変わったか、普段普通体を使うかどうかについて自由記述で回答してもらった。

こうして4名から得られたデータは、学習者ごとに、スタイルのどのような側面に対する記述なのかによって分類し、分析を行った。記述の中にはスタイルの問題でないものも含まれていたため、これらは分析から除外した。

5. 結果と考察

5.1 日本語観察記録の結果

記述された分量には学習者間で差があったものの、皆が日常生活を通して、スタイルについて何らかのことに気づき、認識を変容させていった様子が窺えた。以下に、日本語観察記録における記述の一覧を学習者別に示す。一覧には、インタビューにより補足的に得られた情報も含むが、これは主に日本語観察記録の記述内容に対する筆者の解釈が正しいかどうかを確認したり、出来事の詳細を尋ねたりしたものである。筆者が一覧にまとめるにあたって、表の「着眼点」では、スタイルのどのような側面に関する記述なのかを分類し、「出来事」にはどのような出来事だったのかを、「解釈・評価」には、当該のスタイルがなぜ使われたかという理由や、そこから受けた印象などをまとめた。当初、本研究は学習者のスタイルに対する「認識とその変容」を捉えようとするものであるため、出来事は時系列に並べ検討するのが適切と考えていた。だが、実際に得られた学習者の記述は、相手や場面、着目されたスタイルの側面などが多様であり、時系列に沿った変容を検討するのは困難であると思われた。そこで、記述内容は時系列ではなく、スタイルのどのような側面に関する記述なのかによって分類することにした。なお、学習者の記述を一覧に転記する際、明らかな日本語の間違いや不自然な表現は訂正したが、なるべく学習者が用いた表現をそのまま使うようにしつつ要約した。

5.1.1 学習者Aの事例

学習者Aは、協定校からの学部短期留学生として、1年の留学予定で来日した。まだ学部生ではあるが、来日時点で流暢に日本語を話すことができ、また、地域住民宅でのホームステイや近隣の小学校等との交流活動などにも積極的に参加していた。表1に、学習者Aの日本語観察記録から得られた事例の一覧を示す。なお、表中の事例1は、来日前の出来事を想起して書かれたものではあるが、日本の大学との日本語でのやりとりであるため、分析に加えることにした。

事例1は、母語話者の日本語教師から指導されたことであっても、学習者は自分の感覚による判断を行っていることを表している。そのような敬語のレベルに対する感覚が、事例2の経験により修正された形となっている。事例3では、目上の人に丁寧体を使われたことが意外だったようであり、その理由を、丁寧さを表そうとしたためだろうと理解している。事例4は、空港職員からの普通体による言葉遣いに不快感を覚えた経験である。田所(2015)でも、韓国人学習者が空港職員から普通体を使われ不快感を覚えたことを語っている。韓国人学習者の場合は、スタイルの理解に、日本語同様に敬語体系を有する韓国語が影響していることが考えられるが、韓国語母語話者ではない学習者Aの場合であっても、年上の相手であろうが、親しくない者、初対面の者から普通体を使われることは心外だったようである。事例5～8では、さまざまな場面で社会規範的に期待されるスタイルからシフトが起こっていることに気づき、その理由や効果について理解を図っている。事例9では、終助詞が敬語の与える印象に影響することを理解している。

表1 学習者Aの事例

	着眼点	出来事	解釈・評価
1	敬語のレベル	中国にいるとき、日本の留学先である大学に送るメールを日本人の先生がいつも丁寧な言い方に直してくれた。「と思います」→「と存じます」など。	先生からすればそのほうが礼儀正しいが、私としては、時々硬い表現だと思う。
2		先生に「お忙しいところ申し訳ございません」と言うと、『『申し訳ありません』でいいです』と言われた。	確かに、日常生活での学生による先生への言葉遣いは、それほど丁寧ではなかった。
3	上下関係による使い分け	授業で先生が私に敬語を使った。	目上の人に敬語を使われて恐縮したが、先生は丁寧さを表そうとしたのだと思う。
4	親疎関係による使い分け	空港で税関の手続きを終え、パスポートをカウンターに忘れたまま行こうとしたところ、職員のおじさんに「これを持って行かないと出られないのよ」と言われた。	私のことを本当にバカだと思ったのか、そそっかしいと思ったのかわからないが、そのような普通体の使い方を日本に来てから初めてされた。
5	スタイルシフト	授業で先生が「こんな言い方、普段言えますか」と言ったのに対し、ある日本人学生が「言えない」と普通体で答えた。	敬語を使うべきときでも使われない理由は、以下のよう考えた。1) まだ一文が終わっておらず、相手にその続きを補完させたいとき。2) 簡潔に言いたいとき。3) その他(敬語がわからない、相手との距離を縮めたい、相手を見下している、相手の身分がわからない、など)
6		小学校での交流活動で教室を移動するとき、児童に「先生、はやくはやく」と言われ、私はつい「少々お待ちください」と返答したところ、その男の子は「少々お待ちします」と言った。	「はい」などと言ってくれることを期待したが、私の言った言葉をまねて敬語を使ってくるのは面白かった。リラックスした雰囲気の中、私が急に雰囲気合わない正式な敬語を使ってしまい、それに気づいてわざと敬語を使い返したのか、言葉と雰囲気の間ギャップができて面白かった。
7		チューターさんに会う時に、私は「お手洗いにいきます」と言った。チューターさんは「オッケーでございます」と返事した。	カジュアルな「オッケー」に礼儀正しい「でございます」を組み合わせるというコントラストが妙に面白かった。
8		年末年始に日本人家庭にホームステイしたとき、年越しそばを渡すお母さんに、お父さんは「ありがとうございます」と言った。	夫婦間、家族同士であっても正式にお礼を言うのはいい文化だと思う。
9	終助詞	授業のとき先生はきっちり敬語を使うが、よく最後に「ねー」を付ける。	敬語を使っているのに逆に親近感を感じる。「ねー」によって、敬語の正式な感じが弱くなっていると思う。丁寧さと同時に、親しい感じを与える。

5.1.2 学習者Bの事例

学習者Bは中国の高校で日本語講師を数年務めた後、来日して日本の大学院に入学した。日本語を教えるだけでなく、来日時時点で既に流暢に話すことができていた。来日して間もなく、大学教員の紹介で地域の中国語教室での講師も務めるようになり、そこに通っている年配の生徒とは親しくしているようである。

事例1では、中国語教室の年配の生徒が、年下である自分に対し丁寧体を使うことに気づきが起き、自分の教師という立場がそうさせたのではないかと解釈している。事例2では、郵便局員に普通体を使われたことに引っかけ、その理由として、自分が年下だから、あるいは外国人だからではないかと考えている。年上であっても、疎の関係の人から普通体を使われてマイナスの印象を抱くのは、学習者Aが空港職員から普通体を使われたことと共通する。母語話者は非母語話者と接する際、日本語の規範から解放されたり、敬語は難しいだろうという意識を抱いたりすることにより普通体を選ぶ場合があるが(伊集院, 2004)、相手の非母語話者にはマイナス印象を抱かれる場合があることを、事例2は示している。事例3では、近い関係、特に年上の人であれば普通体を使ってほしいと思っていることが表れている。この事例は、相手に期待するスタイルには、教師・生徒という上下関係よりも、親疎関係が重視されていることを示唆しており、中国語母語話者のスタイルの使い分けは「親疎関係」を重要な判断基準にしているという山口(2002)の結果とも重なる。事例4では、同じ中国語教室の生徒が自分に対しスタイルを使い分けていることに気づき、場面をその要因として考えている。事例5では、LINE

表2 学習者Bの事例

	着眼点	出来事	解釈・評価
1	上下関係による使い分け	中国語教室の生徒さんたちは、私に対しては丁寧体を使うのに、大学院の同級生である日本人女性Eさんが飛び入り参加すると、Eさんには普通体で話しかけていた。	私は中国語を教える教師であり、Eさんは同じ日本人の年下だからではないかと思った。
2	親疎関係による使い分け	郵便局員に普通体を使われた。	理由は二つあるかなと思った。一つ目は相手のほうが年上だから。もう一つは私が留学生だから（普通体は丁寧体より分かりやすいと日本人は思っているのかな?）。最初は丁寧体で途中から普通体に変えられると、自分の日本語が下手だと思われたと感じる。日本人が普通に使う言い方が聞きたい。
3		中国語教室の生徒の一人（女性、50歳代以上）が、最近普通体をよく使ってくるようになった。	普通体を使ってくれと、すごく嬉しく感じる。雑談をするときに、年上の方に丁寧体を使われると距離感を感じる。
4	場面による使分け	中国語教室の生徒さんは、授業では丁寧体だが、食事会では普通体を使っていた。店員さんには普通体を使っていた。	授業中に丁寧体を使うのは改まった場面だからで、店員さんに普通体を使うのは、相手が年下だからだと考える。
5	スタイルシフト	Fさん（年上の女子学生）の私に対するLINEでの返答で、普通体と丁寧体を混用させていた。	Fさんとの距離感を表していると思った。丁寧体からため口に移ろうとしている時期であり、お互いに少し普通体を混ぜて試している。

で相手がスタイルシフトを行ったことに対し、心理的距離を縮めようとしていると解釈しており、自らもそのようにしていると述べている。実際に母語話者は、社会的に対等な相手とは、初対面の段階から時間経過とともに普通体へのスタイルシフトが増えていくことがわかっている（伊集院，2004；申，2007）。

5.1.3 学習者Cの事例

学習者Cは、中国で日系企業に勤めてから、高校の日本語教師を数年務め、日本の大学院に留学した。日本語は来日時点で既に流暢に話すことができていた。大学院修了後は日本語教師として復帰することを目指している。

表3 学習者Cの事例

	着眼点	出来事	解釈・評価
1	親疎関係による使い分け	焼肉屋で店員さんに「アレルギーはない？」と普通体で聞かれた。	外国人だからか、それとも、同年代だから普通体で話したのかなと思った。
2		発表の打ち合わせをするとき、自分は丁寧語を使っていたところ、相手の日本人学生が普通体を使い出した。それ以来、彼女とは互いに普通体で話している。	嬉しい。相手との距離が近くなったような気がする。
3		同年代の男子学生と授業の発表内容について打ち合わせをしているとき、相手は最初丁寧体を使っていたが、しばらくしてから普通体を用いることもあった。	相手の丁寧体、普通体の使い分けによって、相手との距離を判断している。この男子学生の場合、個人差によるものだと思う。

事例1では、学習者A、Bと同じく、疎の関係の人から普通体を使われたことに引かなかったようである。その理由については学習者Bと同じく、自分が外国人だからである可能性を挙げている。事例2では、学習者Bと同じく、スタイルを心理的距離の指標として捉えており、互いに普通体に変化することを望ましく感じている。また、そのようなスタイルの使い分けは、事例3で述べられているように話し手の個人差によるものと理解しているようである。

5.1.4 学習者Dの事例

学習者Dは中国の大学を卒業した後、直接日本の大学院に留学した。日本語を話すことにはまだたどたどしさが残るが、日本語観察記録では、日常で使われるスタイルのさまざまなことに対する気づきが述べられていた。

表4 学習者Dの事例

	着眼点	出来事	解釈・評価
1	上下関係による使い分け	アルバイトの面接をするとき、店長が「おかけください」と言った。	私は応募者であり、店長は未来の上司なのだから、店長が丁寧な言い方をするのは意外だった。初対面だからだと思うが、優しい印象を受け、緊張せずにすんだ。
2	親疎関係による使い分け	同年代の日本人と知り合い、親しくなってからお互いに普通体を使うようになった。	普通体だとリラックスして話せる。心の距離が縮まる。
3	スタイルシフト	ゼミで研究の話から雑談になると、日本人の先輩は先生にも普通体を使っていた。	私は最初、先生が怒るのではないかと心配したが、先生はまったく気にしていない様子だった。非正式の場面で普通体を使うと、話し手と聞き手の距離を縮められることがある。
4		日本人の先輩が発表で丁寧体を使う中、「～もある」と言うときだけ普通体を使った。	状況によって、日本人は普通体と丁寧体のシフトを起こす。確認するときや短い文を言うとき、強調するときなど。
5	終助詞の使用	日本人の学生が日本語に自信がない私を励ますときに、よく丁寧体に「よ」「ね」を使っている。	終助詞を使うことでやさしい口ぶりになる。
6		日本人は議論するときによく「かな」を使っている。	これについて日本語の先生に質問したところ、自分の考えに自信がないときに「～かなと思います」を使うとのことだった。

事例1では、学習者Aと同じく、目上の者から丁寧体を使われることに気づきが起こったことから、目上の者は目下の者に普通体を使うものと理解していたことが窺える。ウォーカー（2011）では、シンガポールの初級学習者には、スタイルについて、上位者は下位者に普通体を使うものと認識している者がいたことを指摘しているが、学習者A、Dのように、上級学習者であってもこのような認識をもち得ることが窺える。事例2では、学習者B、Cと同じく、関係の近い者からは普通体を使われることを望んでいることがわかる。事例3、4では、規範であるはずの丁寧体使用から、一時的に普通体にシフトされる場合があることに気づき、それがいつ起こるのか、どんな効果があるのかについて考察している。事例5、6では、学習者Aと同様に、終助詞の使用が丁寧体の与える印象に関わることを学んでいる。

5.2 自由記述の結果と考察

以上の日本語観察記録の結果と、調査終了時の自由記述をふまえて考察を行う。来日当初の認識として、どの学習者にも共通していたのは、相手との上下関係や親疎関係によって、用いるべきスタイルは一律で決まっているかのように思っていたことである。自由記述で学習者Aは「親しい人の間でも結構丁寧な言い方をすると気づき、驚きました。」、学習者Bは、「日本に来る前は、年上が年下に全てを常体で言うと思った。一方、年下が年上に（家族ではない場合）必ず敬体を使うと思った。」と述べている。ウォーカー（2011）の初級学習者の中にも、上位者は普通体を、下位者は丁寧体を使うものと認識している者のいたことが示されているが、本研究の結果から、上級学習者であっても、自国での学習だけではそのような認識を抱いてしまいがちであることが示唆される。

また、普通体の使用についてはどの学習者も、関係の近い者とは普通体で話すことを望んでいることが窺えた。学習者Cは「特に日本のクラスメートと一緒にいる時、意識的に普通体を使っています。」、学習者Dは「友達と話す時、普通体を使いたいです。」と述べていた。さらに学習者Bは、親しくなれば「年上のクラスメイトにも常体を使えるというのを感じた。」という。学習者Aは、相手との関係によって丁寧体と普通体の使用比率を調整しているとし、「だから、全部普通体で話せる友達がないから、寂しいです。」と述べていた。Iwasaki(2011)

でも示されていたように、学習者は普通体が相手との親しさをマークするものであるという認識をもともと抱いているが、来日して実際にクラスメートなどに関わることで、丁寧体使用との間でジレンマを抱くようになることは、学習者によく見られることのようにである。

普通体の意味や用法の認識についても、理解が深まった様子が窺えた。学習者Bは「感情を表す言葉を言いたい時に、常体で使うことにより、本音を言っているように聞こえる」、学習者Dは「食べ物、服装、景色などの物事を評価する時、誰にも普通体を使います。『美味しかった!』『美味しそう』『綺麗!』など」と述べていた。実際に、率直な感情を表出する際の発話では、丁寧体での会話であっても普通体がよく用いられる(三牧, 1993, 2000; 宇佐美, 1995; 陳, 2003)。学習者AとDの日本語観察記録にも、普通体は必ずしも親密さや心理的距離を表すマーカーとして用いられるものではないことへの気づきが起こっていた。自由記述で学習者Dは、「たまに強調する時、親しくない人と話す場合に、普通体も使います。」「もしかしたら喧嘩する時があれば、普通体を使います。」と述べていた。日本語教育において普通体は、敬意を表さないカジュアルなスタイルとして説明されがちだが、スタイル運用の実態に接した学習者は、実際は上記のような多様な意味・用法を有したものであることに気づき得るようである。

上記のようなスタイルに対する認識の変容は、学習者が日本での日常生活を通して、大学の教師や友人、あるいは学外のさまざまな立場の人と接する中で、自分の認識と異なる使用を目の当たりにすることにより起こったものである。これは、日本語教育の現場であっても、目上の人には丁寧体を、親しい人や年下には普通体を使うといった規範的な用法から外れる使用を提示することで、認識の変容を引き起こせる可能性を示唆するものと言えよう。

6. おわりに

本研究では、知見が不足していた日本語のスタイルに対する学習者の認識について、事例研究として調査を行った。留学で来日した直後の中国人上級学習者4名を対象に、日本での数か月間の生活を通して、スタイルに対する気づきを逐一記録してもらった。その結果、英語母語話者や韓国語母語話者を対象にした先行研究と同様に、学習者はさまざまなコンテキストにおけるコミュニケーションを通して、スタイルについて自分が抱いていた認識と、母語話者による実際の使用との間のギャップに気づき、自分なりにこのギャップを埋めようと理解を図っていることが示された。先行研究では、データ収集の方法に主にインタビューが用いられているが、本研究では、学習者自身に逐一記録してもらった方法を用いたことにより、より多様で詳細な事例が収集できたものと考えられる。

本研究の結果が示唆することは、学習者がスタイルの認識を深められるかどうかは、日常生活でどれだけ多様な人と多様な関わりをもつかに大きく左右されるという点である。そのため、学習者個人の活動範囲や交友関係による偏りが生じやすいものと思われる。さらに、同様のコンテキストを経験したとしても、スタイルへの気づきは誰にでも起こるというものではないし、気づきが起こっても理解のされ方まで一様とは限らない。岡崎(2016)などでも示唆されているように、日本在住の上級学習者であっても不自然な、あるいは失礼になりかねない普通体の使い方をする者は、スタイルに対する自分の認識を修正する機会や気づきが得られないままになっているとも解釈できる。

したがって、教室指導でできることは、学習者にさまざまなコンテキストを経験する機会を設け、そこでの気づきと理解を促すことである。無論、普段の授業だけで現実のあらゆるコンテキストを網羅することはできないので、本研究で学習者に気づきが起こったような事例をケーススタディとして取り上げ、さまざまに検討することを通して、普段の生活の中で自ら気づき、理解を深めていける力を身につけることを目指すべきであろう。例えば、学習者Dの記述に見られたような、教師と話している学生がときおり普通体を使っている事例を提示し、相手が目上の人であっても普通体が使われるのはどんなときか、その効果は何かといったことを考えるケーススタディが考えられる。だが、どのような事例を取り上げるのが妥当なのかについては、さらにデータを収集し、学習者のスタイルに対する認識とその変容について、一般化および理論化を図っていく必要がある。

付記

本研究は、日本学術振興会科研費(課題番号:20K13076)の助成を受けた。

参考文献

- 生田少子・井出祥子 (1983) 「社会言語学における談話研究」『言語』12 (12), 77-84.
- 伊集院郁子 (2004) 「母語話者による場面に応じたスピーチスタイルの使い分け―母語場面と接触場面の相違―」『社会言語科学』6 (2), 12-26.
- 今村圭介 (2014) 「日本語学習者に対するスピーチスタイル教育に向けた実態研究」博士学位論文, 首都大学東京
- ウォーカー泉 (2011) 『初級日本語学習者のための待遇コミュニケーション教育―スピーチスタイルに関する「気づき」を中心に―』スリーエーネットワーク
- 宇佐美まゆみ (1995) 「談話レベルから見た敬語使用―スピーチレベルシフト生起の条件と機能―」『学苑』662, 27-42.
- 宇佐美まゆみ (1998) 「初対面二者間会話における「ディスコース・ポライトネス」」『ヒューマン・コミュニケーション研究』26, 49-61.
- 宇佐美まゆみ (2001) 「「ディスコース・ポライトネス」という観点から見た敬語使用の機能―敬語使用の新しい捉え方がポライトネスの談話理論に示唆すること―」『語学研究所論集』6, 1-29.
- 宇佐美まゆみ (2015) 「日本語の「スタイル」にかかわる研究の概観と展望―日本語会話におけるスピーチレベルシフトに関する研究を中心に―」『社会言語科学』18 (1), 7-22.
- 大津友美 (2007) 「会話における冗談のコミュニケーション特徴―スタイルシフトによる冗談の場合―」『社会言語科学』10 (1), 45-55.
- 大浜るい子・鈴木雅恵・多田美有紀 (1998) 「自由談話に見られるスピーチレベルシフト現象」『教育学研究紀要』44 (2), 389-397.
- 岡崎渉 (2015) 「上級日本語学習者による普通体へのスタイルシフト―インフォーマルスタイルに着目して―」『広島大学大学院教育学研究科紀要第二部 (文化教育開発関連領域)』64, 147-156.
- 岡崎渉 (2016) 「上級日本語学習者による独話的発話の使用実態」『留学生教育』21, 9-16.
- 岡崎渉 (2017) 「スタイルシフトにおける非デスマス形はいかに情意を表すか」『表現研究』105, 21-30.
- 岡崎渉 (2020) 「デスマス形会話における独話的発話の談話機能」『言語表現研究』36, 47-60.
- 岡本能里子 (1997) 「教室談話における文体シフトの指標的機能―丁寧体と普通体の使い分け―」『日本語学』16 (3), 39-51.
- 奥西麻衣子 (2019) 「同級生の日本語母語話者との会話に見られる留学生の普通体使用―言語社会化の観点から―」『日本語教育』172, 134-148.
- 嶋原耕一 (2014) 「母語場面及び接触場面の同等初対面会話におけるアップシフトについて」『社会言語科学』16 (2), 66-74.
- 嶋原耕一 (2015) 「接触場面の同等初対面会話におけるダウンシフトについて―聞き手に対する働きかけの強さという観点から―」『留学生教育』20, 47-56.
- 清水崇文 (2009) 『中間言語語用論概論―第二言語学習者の語用論的能力の使用・習得・教育―』スリーエーネットワーク
- 申媛善 (2007) 「日本語と韓国語における文末スタイル変化の仕組み―時間軸に沿った敬体使用率の変化に着目して―」『日本語科学』22, 173-195.
- 申媛善 (2009) 「韓国人日本語学習者の文末スタイルの運用―時間軸に沿った敬体使用率の変化に着目して―」『日本語教育』140, 81-91.
- 田所希佳子 (2015) 「スピーチレベルの選択に伴う場面認識に関する考察―韓国人留学経験者へのインタビューから―」『社会言語科学』18 (1), 50-59.
- 陳文敏 (2003) 「同年代の初対面同士による会話に見られる「ダ体発話」へのシフト―生起しやすい状況とその頻度をめぐって―」『日本語科学』14, 7-28.
- 陳文敏 (2004) 「台湾人上級日本語学習者の初対面接触会話におけるスピーチレベル・シフト―日本語母語話者同士による会話との比較―」『日本語教育論集』20, 18-33.
- 田鴻儒 (2009) 「中国における上級日本語学習者のスピーチレベルの使い分け―初対面会話相手の年齢に応じて―」『大阪大学言語文化学』18, 169-181.

- ナズキアンフミコ (2007) 「インタビュー談話における常体の機能」南雅彦 (編) 『言語学と日本語教育 5』くろしお出版, 141-155.
- 長谷川葉子 (2010) 「第5章 親密さと敬い」廣瀬幸生・長谷川葉子 (編) 『日本語から見た日本人—主体性の言語学—』開拓社, 134-157.
- 増田恭子 (2010) 「日本語学習者の文体シフトについて—学生と教師との会話からの一考察—」南雅彦 (編) 『言語学と日本語教育 4』くろしお出版, 191-212.
- 三牧陽子 (1993) 「談話の展開標識としての待遇レベル・シフト」『大阪教育大学紀要 I 人文科学』42 (1), 39-51.
- 三牧陽子 (2000) 「丁寧体基調の談話にみる独話的発話・直接引用・心情の直接表出—「働きかけ方式」のポライトネス・ストラテジーとして—」『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』4, 37-53.
- 三牧陽子 (2002) 「待遇レベル管理からみた日本語母語話者間のポライトネス表示—初対面会話における「社会的規範」と「個人のストラテジー」を中心に—」『社会言語科学』5 (1), 56-74.
- 三牧陽子 (2007) 「文体差と日本語教育」『日本語教育』134, 58-67.
- 三牧陽子 (2013) 『ポライトネスの談話分析—初対面コミュニケーションの姿としくみ—』くろしお出版
- 山口和代 (2002) 「ポライトネスに応じた言語形式と人間関係の認知—中国人ならびに台湾人留学生と日本人母語話者との比較の視点から—」『社会言語科学』5 (1), 75-84.
- 李吉鎔 (2003) 「フォーマルな談話での非デスマス形式の切換え—日本語母語話者と中間言語話者の比較—」『阪大社会言語学研究ノート』5, 79-96.
- 林君玲 (2005) 「台湾人学習者の初対面日本語会話におけるスピーチレベルの使用実態」宇佐美まゆみ (編) 『自然会話分析と会話教育総合的モジュール作成への模索』東京外国語大学大学院地域文化研究科21世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」, 261-280.
- Caltabiano, Y. M. (2008). Consequences of shifting styles in Japanese: L2 style-shifting and L1 listeners' attitudes. In Bowles, M., Foote, R., Perpifian, S., & Bhatt R. (Eds.), *Selected Proceedings of the 2007 Second Language Research Forum*, 131-143, Somerville, MA: Cascadilla Proceedings Project.
- Cook, H. M. (2001). Why can't learners of Japanese as a foreign language distinguish polite from impolite speech styles? In K. R. Rose & G. Kasper (eds.) *Pragmatics in Language Teaching*.
- Cook, H. M. (2002). The social meanings of the Japanese plain form. In Akatsuka, N., & Strauss, S. (Eds.), *Japanese/Korean Linguistics* (Vol.10), 150-163, Stanford, CA: CSLI Publications.
- Cook, H. M. (2008). *Socializing Identities through Speech Style: Learners of Japanese as a foreign language*. Clevedon, UK: Multilingual Matters.
- Ishihara, N., & Tarone, E. (2009). Subjectivity and pragmatic choice in L2 Japanese: Emulating and resisting pragmatic norms. In N. Taguchi (Ed.), *Pragmatic Competence: Mouton series in pragmatics*, 5, 101-128, Berlin: Mouton de Gruyter.
- Iwasaki, N. (2005). A year abroad in Japan: Participants' perspectives. *Association of Teachers of Japanese Occasional Papers*, 7, 12-24.
- Iwasaki, N. (2011). Learning L2 Japanese "politeness" and "impoliteness": Young American men's dilemmas during study abroad. *Japanese Language and Literature*, 45, 67-109.
- Marriott, H. (1995). The acquisition of politeness patterns by exchange students in Japan. Freed, B. F. (Ed.), *Second Language Acquisition in a Study Abroad Context*. John Benjamins Publishing, 197-224.
- McMeekin, A. (2006). Negotiation in a Japanese study abroad setting. In DuFon, M. A., & Churchill, E. (Eds.), *Language Learners in Study Abroad Contexts*. Multilingual Matters, 177-202.
- McMeekin, A. (2014). Japanese learners' indexical uses of the da style in a study abroad setting. *Japanese Language and Literature*, 48, 1-38.
- Okamoto, S. (2011). The use and interpretation of addressee honorifics and plain forms in Japanese: Diversity, multiplicity, and ambiguity. *Journal of Pragmatics*, 43 (15), 3673-3688.
- Taguchi, N. (2015). *Developing Interactional Competence in a Japanese Study Abroad Context*. Bristol: Multilingual Matters.
- Taguchi, N. (2016). Learning speech style in Japanese study abroad: Learners' knowledge of normative use and

actual use. In R. A. vanCompernelle & J. McGregor (Eds.), *Authenticity, Language, and Interactions in Second Language Contexts*. Bristol, New York: Multilingual Matters, 82-108.

注

1. 話し言葉における丁寧体・普通体については「スピーチレベル」などとも呼ばれるが (cf. 宇佐美, 2015), 本稿では「スピーチスタイル」で統一する。
2. スタイルシフトには情意的機能の他に談話機能を主張する研究もあるが (生田・井出, 1983; 三牧, 1993; 宇佐美, 1995), 雑談をデータに用いた大浜・鈴木・多田 (1998), 陳 (2004) では否定されている。その理由として大浜らは, 当該機能がシフトによるものであることが実際の談話データから証拠立てられていない点, 普通体自体による機能がシフトによる機能と混同されている点を指摘している。シフトの機能の一つに挙げられていた「新話題への移行」について三牧 (2013: 100) は, 先行研究では, 新話題への移行の際に「スピーチレベル・シフトが伴うことがある」と主張されているのに対し, 大浜らの批判は「必ずスピーチレベル・シフトが伴う」と「誤解」したことによるものだろうとしている。だが大浜らは, 新話題に移行するときであってもシフトが起こっていない発話も同程度あることなどから, シフトが当該の機能を果たしていることが会話データから証拠立てられていないことを批判しているのであって, 三牧の反論は的を射ていない。

How do Japanese learners recognize speech style in Japanese?

— A case study on the transformation of recognition with speech style over staying in Japan —

OKAZAKI Wataru

This study investigated Japanese language learners' recognition of speech style in Japanese as a case study. Data were collected from four Chinese advanced-level learners of Japanese, who recorded their recognition of speech style used by native speakers over the course of several months of living in Japan. The results indicated that all four learners recognized that the style they should use was uniformly determined depending on their hierarchical and close relationships with the other person, and that they wanted to use normal form more, but they were conscious of the norm. They all had a common dilemma regarding the use of polite form. Furthermore, the learners noticed that even when native speakers should have used polite form, there was a style shift to normal form, and they considered various associated reasons and effects. Since speech styles are used in a variety of ways even among native speakers, learners need to become aware of them in their daily lives and deepen their understanding accordingly. To consider classroom instruction that supports noticing and understanding of speech style, it would be effective to accumulate knowledge such as that from this study.